ぎ、社會制度の如きも資本家を中心として制定せられ、爲めに富める者益々富み、貧しき者愈々貧しく、之の弊漸く烈しくなるに從ひ、社會民衆の擧つて叫ぶ合言葉は立憲政治――勞働組合運動とはなつたのである。

此の過程は歐洲に於ても等しく佛國革命に續いて、英國に勞働運動起り幾多の志士仁人は血と涙とを以て勞働組合を組織した、一度勞働組合組織せられしや、その文化的價値人道的價値は、忽ち佛獨米に喧傳せられ、遂に勞働運動は澎湃たる世界的大勢とはなつたのである。

我が國に於ても勞働運動は明治十二三年頃より、大井憲太郎佐久間貞一氏等によりて行れ、明治三十年より三十一二年頃は、片山潛安部磯雄高野房太郎西川光二郎氏等によりて、鐵工組合、日鐵機關手組合、活版工組合など組織せられ、盛んなる勞働運動を見たのである。然し乍ら悲しい哉我が國第一の勞働運動は勞働者自身の勞働運動にあらずして、學者先覺者の天降り的勞働運動であつた。從つて華やかではあるが所謂暗默の間に動く底力なく、激越なる論調は遂に官憲と資本家の壓迫を招來し、一方未だ目醒めざる勞働者と相俟つて、我が國第一の勞働運動は之の陣容未だ成らざるに先き立ち早くも解散消滅の悲運に遭遇したのである。かくして一時中絶の姿ではあつたが明治四十五年牧師鈴木文治氏等によつて友愛會が組織せられた、けれども鈴木文治氏自ら産婆役なりと言へるが如く、勞働者自らの勞働運動は未だ生れなかつたのである。然るに越ねて大正五年關西の勞働者は深く眠れる曉きの床を蹴つて勞働運動の征途へと上つた、即ち我が職工組合期成同志會は組織せられたのである。

第貳章　職工組合時代

大正五年は我が國に工場法が發布せられた年であつた。其の頃より職工の氣風及び實力共に昔日の面目を一新し、研究や修養の集會を好み勞働組合の必要を痛感する者又漸次增加しつゝあつたのである。此の時にあたりて職工組合期成會は左の綱領の下に機械工及び電氣工を中心として成立したのであつた。

一我等職工は相互の地位の向上を圖らんがため堅實なる職工組合を組織